復興塾通信

４号

平成１２年９月

復興からまちづくりへ

小森　星児（復興塾塾長）

■ 復興塾は、この夏、事務所の移転とNPO法人神戸まちづくり研究所の開設という大きな転機を迎えた。だれもやらないことに率先して取り組む塾と、持続的な活動が重要な研究所の運営が両立するかどうかわれわれの力量が問われる時だが、２枚になった看板をそう簡単にたたむわけにはいかない。

新たに事務所を置いた吾妻通４丁目周辺は、100年前、神戸最大のスラムとして形成されつつあった葺合新川地区の中央に当り、わが国の都市計画史上もっとも早く環境改善型のまちづくりが実施された場所である。さらにそのきっかけを作ったのが、ボランティアの先達ともいうべき賀川豊彦であったことも改めて想起したい。かれは1909年から関東大震災救援を契機に東京に移るまで、10年以上に亙ってこの地区で超人的な活動に従事した。かれの犯した誇張や偏見のため、まちづくりのパイオニアとしてのかれの功績は歴史家に無視されがちであるが、労働運動や農民組合の指導者、生協の創設者、さらに社会事業家としての活動に一貫して流れる社会変革の情熱に学び、その精神を継承するのに絶好の立地だといえよう。

■ さて、今年の新しい事業として、われわれはNPOのインキュベーターとパソコン教室の運営という課題に取り組む。一番勝負に強いが、長続きする仕事を苦手とするのが塾の体質である。しかし、必ずしも希望通りではないにせよ、われわれの提案が取り上げられて市民活動支援の拠点が誕生したので、なんとか期待に応えたい。ただ、庶民的な周辺の環境は貧乏覚悟の市民団体にふさわしいといえるが、なんとも殺風景で夢を育てるには不向きである。花を育てるNPOに入居してもらって、校庭の一部を実習園に開放するなど弾力的な運営が必要ではなかろうか。

■ ここで第３回＜神戸あいウォーク＞をめぐる最近の動きについて報告しておこう。先月、兵庫県から来年１月１７日に震災記念行事の一環としてボランティアウォークを実施したいという意向が伝えられた。従来、県はこの日に震災犠牲者追悼式典を主催してきたが、今後は「防災とボランティアの日」に衣替えし、ウォークと東部新都心に建設予定のメモリアルセンターでの集会を柱にする計画である。このうちウォークは山手幹線沿道を東コースは芦屋、西コースは西代を起点にそれぞれ約10キロを歩き、HATで合流するという。

この案にたいする塾生の反応はメーリングリストをご覧になれば明らかになるが、結論として＜あいウォーク＞は予定通り１月14日に実施することにした。＜あいウォーク＞は慰霊や防災意識の高揚が主たる目的ではなく、市民による市民のための活動を支援するイベントである。したがって、県主催の行事とは一線を画するのが適当で、県にたいしては西ルートで競合することは避けてほしいと要望した。

なお、この交渉を通じて意外な発見があった。実質上県の出先である震災記念協会は、震災記念行事にたいし経費の半額を助成している。過去２回、＜あいウォーク＞も申請したが、理由の説明もなく却下されてきた。ところが今回、県との折衝の過程で市民基金への寄付がウォークの事業収入と認定され、申請条件を満たしていないとされてきたことが分った。窓口の杓子定規な対応は今に始まったことではないが、最近のいくつかの事例を見ると、県のいうパートナーシップの前途に危惧の念を禁じえない。

■　９月１日、県から計画修正の申し出があった。主な変更点は名称をメモリアルウォークとする、東コースのみ実施する、主催者は昨年までと同様、国、県、10市10町とするの３点で、当方の要望はほぼ受け入れられた。

小森　星児　komori@kobe-yamate.ac.jp

コラム　言いたい放題

１対１の同点で迎えた９回表、ノーアウト１，２塁で、バッターは代打山田。カウントはノースリー。流れは完全にタイガースへ。

しかし、山田はツースリーから見逃しの三振！続く代打八木も内野フライ。あの一球で流れはジャイアンツへ傾いたように見えた。

このまま、タイガースがさよなら負けでもすると、山田の三振した一球に勝負の綾が凝縮していたことになる。ところが、ピッチャー岡島はその傾いた流れを、引き寄せることができずに、坪井に打たれてしまう。カウントはやっぱりツースリー。

見所のあるイニングだった。あの一球が、あの一打が、あの守備が試合の流れを変えた。そんな場面が必ずある。草野球にでもある。だから、野球はおもしろい。この流れをどちらが引き寄せるかが、勝負の分かれ目になる。そのためには、試合全体を眺める眼が必要になる。いい監督とは、この流れを読んで、早めに対処できることを言うのだろう。草野球では、流れが読めても、プレイヤーに対処する力がないのが、逆に、またおもしろいのだが・・・

さて、今の世の中の流れはどうなのだろう。ボランティアやＮＰＯに吹いていた風は、もはや止んでしまったのだろうか。もう一度あの流れを引き寄せること。６年目に向けて、そんなことを考えてしまった。

Ｍ生

タイズ財団会長パイク氏招聘・全国講演の報告

多言語センターFACIL代表、塾生　吉富志津代

1．どうして今タイズなのか

神戸復興塾では、1998年、1999年とサンフランシスコＮＰＯ視察ツアーを企画、実施、報告書の発行という事業を行ってきましたが、震災から5年を経た今そのテーマも「まちづくり」、「市民メディアとその周辺のＮＰＯ」から、次回の「中間支援組織とＮＰＯしごとづくり」というように移行してきています。まさに震災後の助け合いは具体的な社会変革の活動へのうねりに変わってきているのだと思います。

ただ、残念ながらまだまだ市民の一部にしかそのうねりは伝わっていないというのが実状ではないでしょうか？

タイズ財団は、小口寄付者のお金を集めて大きな助成活動を行うコミュニティ財団で、社会変革的な市民活動団体に絞って助成を行うことから「社会変革財団」「ＮＰＯのベンチャーキャピタリスト」などとよばれています。姉妹組織のタイズセンターは立ち上げたばかりの小さな市民団体を内部に抱え、マネジメント支援、育成をする「ＮＰＯインキュベート」機能を果たし、エコネット、ピースネットなど米市民運動の代表的コンピューターネットワークをかかえ、さらに、50団体が入るＮＰＯセンターを独自に建設するなど「カネ、マネジメント、場所、情報」のあらゆる側面からＮＰＯインフラづくりを行うモデルを生み出しました。

今回は、2度目の視察でタイズ財団を訪問した際に、「タイズというＮＰＯインフラづくりの優れた事例は、絶対に日本に紹介される必要がある」とコーディネーターの岡部一明氏から話を持ちかけられて、その創設者であり現会長でもあるドラモント・パイク氏をお招きして、先進事例の講演からＮＰＯの活動が社会に浸透しつつある日本におけるＮＰＯ支援の理念と具体的なモデルを学ぶため、この全国講演の企画・コーディネートを神戸復興塾が担うことになりました。

2．全国講演の日程

全国への呼びかけは、関係者がもともと何らかのつながりのある全国でも中間支援組織として中心的なＮＰＯへのものなので、スムーズに話が進み、講演は次のような日程で行われました。

・6/10(土) NPOサポート講演・実行委員会(福岡)
・6/12(月) 北海道ＮＰＯサポートセンター(札幌)
・6/15(木) せんだい・みやぎNPOセンター(仙台)
・6/17(土) 市民フォーラム21/NPOセンター(名古屋)
・6/18(日) しみん基金・KOBE、神戸復興塾(神戸)

3．神戸講演

神戸の講演は約130名の参加者で、神戸復興塾からしみん基金・ＫＯＢＥへのあいウォーク寄付金の授与式（写真）とともに、神戸クリスタルタワーにて行われました。その後の交流会はお別れ会を兼ね、翌日、たかとりコミュニティーセンター、ＣＳ神戸などＮＰＯセンターの見学と、パイクさんお待ちかね日本酒醸造所の見学。そこでの夜の交流会を最後にパイク氏は日本を発ったのでした。

4．タイズ講演が日本にもたらしたもの

今回、パイク会長からのメッセージはたくさんあります。オンライン寄付や日本の寄付金税控除でのイノベーション。確かにアメリカとの制度や社会の成り立ち、市民意識などの違いはあっても、日本の「現体制下」でも何らかの形でＮＰＯ寄付を税控除にすることは不可能ではないことについての具体的な話も出ました。

でもそのうち最も大切なのは、「新しいアイデアにチャレンジしていく精神」だったのではないでしょうか。事なかれ主義の行政を相手に社会を変えて行くには少々の失敗やリスクを恐れていてはいけないということ、そのリスクを最小限にするための支援やインフラを整えていくのだということです。パイクさん自身もタイズ設立から5年後に自分の給料が出せるようになったという事実にも勇気づけられました。

あとひとつ特筆すべきは、この講演によって全国5箇所の中間支援ＮＰＯのつながりができたことでしょう。9月に塾が実施する第3回視察ツアーの参加者は、全国各地からにわたっています。このつながりは、市民社会形成にむけたさらなるネットワークへと着実に進み始めたのでした。

最後に、この場を借りてパイク会長はもとより、岡部一明さんをはじめ協力して下さった多くの方々に心より感謝申し上げて報告とさせていただきます。

吉富志津代 tomi@kba.att.ne.jp

「アート・サポート・センター神戸」の概要

ながらく皆様に支えていただいた海文堂書店･海文堂ギャラリーを９月末で退任させていただき、１０月から北野・ハンター坂に「ギャラリー島田」を開きます。それとともに、従来から関わってきた私本来の役割である文化活動の中間支援の仕事を本格的に取り組むために「アート・サポート・センター神戸」を始めます。その構想は次の通りです。

今まで公益信託･亀井純子基金と神戸文化復興基金を通じて、また、「しみん基金こうべ」の設立に関わって文化支援関係の活動を行ってきました。今後、更に積極的に展開する拠点として、ここに「アート・サポート・センター神戸」を設立します。

｛目的｝

神戸の創造的文化の交流拠点として発信するとともに、そうした文化を支える基盤づくりを目指します。

｛内容｝

1　芸術発表活動にたいするコンサルテーション。アドヴァイス。
2　文化活動全般に関する調査研究。提言。
3　文化支援基盤整備(財源確保のためのシステムづくり)。提言。
4　上記事業にかんするインターネット、出版物、セミナー、講演などによる情報発信
5　各種市民活動とのリンクによるアウトリーチ･ネットワーキング
6　「サロン」を通じての交流、創造、発信、市民力の養成
7　特定公益増進法人・マンション型文化コミュニティー財団設立の研究

などを行います。

「公益信託･亀井純子文化基金」、「神戸文化復興基金(アート・エイド・神戸実行委員会)」の事務局もここに置きます。アート・サポートセンターの運営委員として当面、二つの基金の運営委員11名に就任いただく予定です。

｛財源｝

運営の財源はサポーターの会費と寄付を中心に、将来は受託事業による収入による文化活動助成制度の充実を目指します。

会費　1万円（一口）のサポーターと寄付による特別会員を広く募集します。

アート・サポート・センター神戸代表、塾生　島田　誠

■　サロン「今月のサロン」

芸術家のみならず、創造的な人々が交流し、刺激しあい、何かを生み出していく場･トポスとしてのサロンを運営します。「神戸塾･火曜サロン」などは如何でしょうか。

美術に限らず、音楽、演劇、文学、映画、パフォーマンスなどの上演･講演･トークパーティーなど通じて創造的交流を図ります。

■　公益信託・亀井純子文化基金

１９９２年に設立した若い芸術家の活動を支援する助成基金。毎年、1件２０万円の活動助成を４～５件おこなう。現在の基金残高１６百万円。

■　アート・エイド・神戸実行委員会（神戸文化復興基金）

震災後の芸術文化による多彩な復興支援活動を展開。５年間で８千万円の事業を展開。文化活動の支援も３千万円に上る。

■　特定非営利活動法人（ＮＰＯ法人）の資格申請を目指します

急がず実績を積みながら、ＮＰＯ法人の資格を取得します。

場所　神戸市中央区山本通2ー４ー２４
リランズ　ゲート Ｂ１

幸い、「アート・サポート・センター神戸」の設立を支援する美術家の会が「チャリティー美術展」を呼びかけて下さり、ギャラリーのお披露目も兼ねて１０月５日から２週間、資金作りのための展覧会を開催します。

正式なオープニングは１０月２７日、２８日、２９日の三日間にわたり趣向を凝らしてやります。皆さんも是非、ご参加下さい。島田　誠 koomori@mxv.mesh.ne.jp

第３次サンフランシスコ視察団出発

９月８日、復興塾主催の第３次サンフランシスコNPO視察団が出発する。今回も岡部さんの案内で、前ページのパイク財団をはじめ、多彩なNPOの活動を見聞する予定である。例によって岡部手配師から大量の参考資料がインターネットで届き、機中での予習が要請されている。参加者も自発的にメーリングリストを開設するなど、早くも勉強が始まっている。

塾からの参加は塾長と山田世話役の２人だが、１１名の参加者のうち４名が女性、このほか数名が現地参加する。今回の特色は実際にNPO活動に従事しているリーダーが多いことで、交流の成果が期待される。

帰国は１５日。

塾生通信

塾生著作の書籍紹介

「地域福祉と住まい・まちづくり」

上田耕蔵著（学芸出版社　1700円）

震災直後1日目は外傷であったが、2日目から3カ月間は内科の病気が急増した。しかしずっと必要だったのは精神科であった。こころの問題が大きくクローズアップされたのもこの震災の特徴であった。しかし住民各人は必ずしもこころの重荷を自覚しているとは限らなかった。また精神科を受診したわけでもない。精神科とは離れた普通の場所で住民は互いの愚痴の言い合い聴きあい支え合い、ボランテイアとの交流などで意識しないで負担を減らしていた。今からするとそれが地域の役割であった。

この5年間、本当にたくさんの事を勉強させてもらった。そのまとめが拙著「地域福祉と住まい・まちづくり／ケア付き住宅とコミュニテイケア」である。

この本の特徴であるが、まず（1）抽象的な概念では人に伝えられない。患者さん・住民が語る、あるいはまちで語られた「うわさ話し」が分かりやすく、説得力を持つ。そこで耳を拡げ「うわさ話し」の収集に努めた。次に（2）震災は「自立」と「助け合い」を教えてくれた。しかし自立にせよ、助け合いにせよ、一体それは何なのか？時間が経てば経つほど疑問になってきた。「助け合い」は人間を形成する必須条件であるが、大きくは国家レベル→社会保障である。小さくはコミュニテイである。もっともっと小さくは人のこころの問題である。それらを展開してみた。

神戸協同病院院長 上田耕蔵 ueda@kobe-iseikyo.or.jp

塾生著作の書籍紹介

「コレクティブハウジングただいま奮闘中」

石東直子＋コレクティブ応援団著
（学芸出版社　2400円）
2000年8月30日発行

「いつでも誰かと会えるし、いつでもひとりになれる」「ひとりで食事をするよりも、たまには大家族のように集まってたべよう！」という、日常生活の中で自然な形で隣人たちが触れ合って暮らせるような住まい方を描いた住宅が、阪神淡路大震災後の被災地で誕生しました。全国初という公営コレクティブハウジング＝協同居住型集合住宅で、「ふれあい住宅」とネーミングされ、1997年から99年の３年間に神戸に７地区、宝塚に１地区、尼崎に２地区、合わせて３４１戸が建設されました。

その言い出しっぺであり、応援団という立場で情熱的に関わってきた石東と小林郁雄をはじめとする応援団たちが、計画づくりから、入居者の居住サポート、ネットワークづくりまでをホッとに記録した奮闘記です。言い換えれば、新しい住まいに戸惑う入居者たちに、器にそった住まい方を育んでいこうよと、お節介の手を差し伸べてきた応援団と入居者たちのドキュメンタリーです。このお節介をわたしは居住サポート＝ソフトな住宅供給と言っています。

隣人とふれあって暮らすことの安心感と楽しさを持った下町長屋の再生ともいえるこの新しい住まい方を、高齢社会に向けて自信をもって発信します。

石東・都市環境研究室主宰 石東直子 VZZ10701@nifty.ne.jp

塾生の推薦書籍

サンフランシスコ発「社会変革ＮＰＯ」

岡部一明著（御茶の水書房　2600円）

待望の本が出た。復興塾の勉強会で、不良塾生の私がテーマに惹かれて参加したのが岡部さんをお招きしての勉強会であった。その時いらい、岡部さんから送られてくる膨大なメールを心躍らせて読んできた。それらはプリントアウトして大半が手元にある。目から鱗の思いをしてきた。

私は経済のグローバリゼイション、世界標準をいいつのる論者にいつも不信を抱いてきた。大競争と弱者救済の二元論でない社会基盤とは、この岡部さんの紹介されているような市民社会の在り方をいう。彼我のあまりの違いに愕然とするけど、まちづくり研究所の目指す方向に大きな示唆を与えてくれることは確かである。

日本は、いつの時代も総動員をかける国である。今、かけられようとしている言葉は「自立」「自律」である。しかし大切なのは「自律・自立」できる基盤とは何かを問うことである。国の成り立ちから違うのですべてがお手本でないにしても、衝撃を受けた。

ここの事例研究としても参考になるけど、何より、ここに溢れるスピリットに酔って欲しい。あの長大なメールを送り続ける岡部さんの不思議な情熱。これらの大いに触発されたい。必要なのはフロンティアスピリットである。

感激した僕は、ベストセラーにしますと、岡部さんにメールで約束した。密かに岡部メールで、知ったかぶりをさせていただいた恩返しである。皆さんの中にもそんな人いませんか。恩返しせんといけませんよ。

島田　誠 koomori@mxv.mesh.ne.jp

復興塾近況（2000 年度）

５月２６日　神戸市生涯学習支援センター（旧吾妻小）へ引っ越し（右下地図参照下さい）
１８：００より吾妻小３階にて神戸復興塾総会。１１年度決算と１２年度予算及び事業計画を承認。野崎委員長がまち研事務局長兼務は困難なため、新委員長に三谷真氏を推薦、承認される。委員は変更なし。

６月２日～４日　第12回まちづくり塾
「こうべ復興塾
～震災復興まちづくり５年目の今～」
（日本建築士会連合会まちづくり委員会主催）
全国各地から集まった受講者19人
第１日は小森塾長講話、魚崎で野崎さんご夫妻、第２日はＨＡＴ脇の浜で石東さん、真野で上田先生、第３日にはまちづくり会館でのＷＳ

６月１８日　**タイズ財団パイク会長講演会**
於：クリスタルタワー（しみん基金・ＫＯＢＥ／神戸復興塾主催）参加者約１２０名。
なお、講演会の開始に先だって、神戸あいウォークで集めた募金２２０万円を復興塾塾長からしみん基金・KOBE黒田理事長に贈呈した。(p2写真)

６月２３日（金）１８：００より吾妻小３階にて神戸まちづくり研究所総会。　１１年度決算と１２年度予算及び事業計画を承認。理事、監事は全員留任。

７月２日　**墨田区「そうだ！！神戸に行こう！」グループ公開講座**
小森塾長宅を振り出しに芦屋中央地区、ココライフ魚崎、吾妻市民活動センター、みくら５、最後に懇親会。
参加者（敬称略）：山田勝巳（川の手倶楽部会長）、山本俊哉（マヌ都市建築研究所）、亀山恒夫（同）、前川裕介（同）、宮本和宏（国土庁土地利用調整課）、小川幸男（墨田区まちづくり推進課）、小林正（同）、中山誠（同）。
「先日は、大変に充実したご案内をいただき、ありがとうございました。向島博覧会（及びその後の展開）に向けた検討の際のヒントや共通認識が得られました。皆様にもよろしくお伝え下さい。
山本　俊哉」

７月５日　**「兵庫県まちづくり広域活動助成」**
公開審査　３０万円助成決定

７月２２日　**朝日新聞大阪支社公開講座**
芦屋中央地区、小森邸、ココライフ魚崎、吾妻市民活動センター、みくら５、最後に「みくら５」にて懇親会。
参加者（敬称略）：鈴木規雄（編集局長）、山本博之（くらし編集部）、三宅貴江（学芸部）、角谷陽子（学芸部）、川島基之（運動部長）、恒成利幸（写真部）、麻生健（写真部）、有吉正徳（運動部）、笹越徹（科学部）、山中茂樹（企画報道室）、柴田直治（社会部デスク）、牧山雪（整理部）。
「今日は暑い中各地をご案内いただき、ありがとうございました。門外漢ですが、被災地の現実の厳しさをいろいろ教えていただき、また、現地の人々の様々な対応ぶりと生き様を知って、感動しました。今後もよろしくお願いいたします。
朝日新聞大阪本社運動部長　川島　幹之」

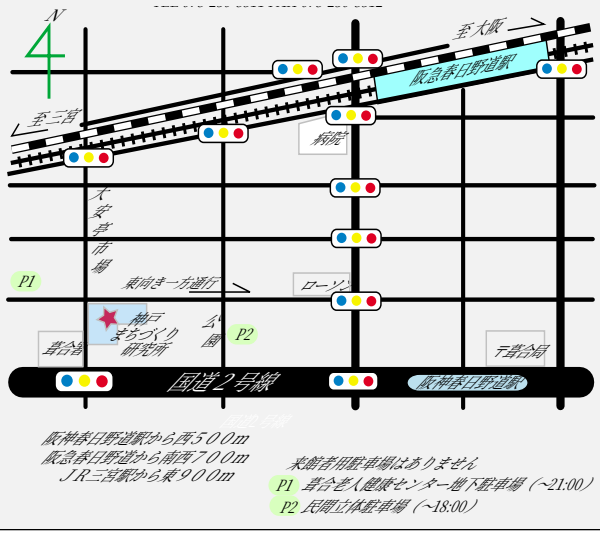
まち研「パソコン教室」予告

今ビジネスの世界では空前のＩＴブームで、これに乗り遅れることは「負け組」になることであるといった脅迫がまかり通っているようです。
ところでＩＴが必要なのはなにもビジネスの世界だけではありません。「儲けていれば多少は無駄使いも許される」ＰＯ（Profit Organization）よりもある意味で厳しい運営を要求されるＮＰＯ・ボランティア団体についても、ＩＴの活用は重要なテーマと言えます。
まち研では「市民活動総合支援センター」のインキュベート事業を支援するためにパソコンスクールがスタートします。
・最新のパソコン６台を駆使し
・最新鋭のＣＡＩ（Computer Aided Instruction）教材などを有効に使いながら
・元大手コンピュータ会社のインストラクター経験者がインストラクター／運営を担当する
といった万全の体制が実現しました。

コレクティブオフィス入居団体のパソコンリテラシーの向上だけではなく、地域の方々に楽しくパソコンを学習していただけるようなカリキュラムも用意する予定です。
詳しくは決まり次第ホームページなどでお知らせいたしますのでご期待下さい。

『編集後記』　表から見れば「塾通信」裏からは「まち研ニュース」というハイブリッド版の第１号です。どこが境界かわかりにくいところが「それらしい」か？スタッフも充実し、最新パソコンも数台導入されました。幻のノルマ（年４回発行）実現の日は近い・・・
by でん

神戸まちづくり研究所・神戸復興塾
神戸市中央区吾妻通　4-1-6
神戸市生涯学習支援センター３Ｆ
TEL：078-230-8511　FAX：078-230-8512
Email　LET07723@nifty.ne.jp
HomePage　http://www.netkobe.gr.jp/machiken/
http://www.survival.org/fukkoujuku/



まち研ニュース

神戸まちづくり研究所設立お披露目

野崎隆一(ＮＰＯ法人神戸まちづくり研究所事務局長)

今年３月１日付けで兵庫県の認証を得て「特定非営利活動法人・神戸まちづくり研究所」（略して「まち研」）は発足しました。その後、廃校となった旧神戸市立吾妻小学校を活かした市民活動総合支援センター構想の運営団体として手を挙げ、正式に６月に事務所を移転することになりました。

「まち研」としては、市民活動総合支援として大きくは２つのことをやっていきたいと考えています。一つは、市民活動のシンクタンク機能を果たすことです。市民活動を発展的に展開していくに当たって、戦略的に何が必要なのかを研究し提言していくことも含まれます。もう一つは、インキュベート機能です。これから市民活動を始めようとしているか、既に始めてはいるが活動がうまくいっていない団体や個人を対象に、コレクティブ・オフィスという形で活動の拠点を安く提供し、市民活動やまちづくりに関するレクチャーやパソコン教室の開催はもちろん、神戸復興塾を始めとする諸団体との出会いを通じた参加や連携の機会を提供しようと考えています。

新しい事務局のスタッフも揃い、什器備品も入ってやっと事務所らしく（？）なってきたのではと思う今日この頃ですが、そろそろここらでお披露目をと考えました。

是非、皆様ご参加いただき「まち研」の前途を祝って下さるようお願いいたします。

日　　時：平成１２年９月２９日（金）18:30より
場　　所:吾妻生涯学習センター　多目的室
記念講演:『２１世紀のまつづくりの課題』
　　橋爪紳也（大阪市立大学助教授）
懇 親 会

吾妻コレクティブオフィスのご紹介

「まち研」では、「市民活動総合支援センター」のインキュベート事業として「コレクティブオフィス」を始めます。「コレクティブオフィス」は、個人やグループの活動を場所や情報の提供を通じてサポートしていくシステムです。「まち研」の持ち味としては、まちづくりや地域づくりとの関連の中に個々の市民活動を位置づけながら、方向性を見つけたり磨きをかけたりしていただければと思います。

第一次の募集で入居の決まった人たちを紹介します。

■村上忠孝（村上環境住宅研究所）

村上さんは、いままで「こうべ ｉ ウォーク」にも参加していただいてた方です。活動の目的は、兵庫県の都市部と地方部との地域間交流を作っていくことだそうです。

吾妻で受けたい支援は、都市部のNPOやボランティアの活動情報です。地域間交流に関心のあるグループとも連携を作って行きたいと考えておられます。

■松原永季（若手ネットワーク）

松原さんのグループは、都市計画やまちづくりコンサル事務所に勤務する若手所員を中心に作られた団体です。震災復興の状況を現象的にとらえた写真展を各地で開
催したり、テーマを持って町をウォッチングしたりといった活動を続けています。吾妻では、今取り掛かっている神戸市まちづくりの歴史資料の整理編纂の作業をしたいとのことです。「まち研」でやろうとしている、「コミュニティリンク」という商業地と住宅地を地域資源を結んだウォークルートによる「地域くらしおこし」事業も手伝ってもらいます。

■石田ヨシ子（おもいやりネットワーク）

石田さんは、中央区のフェニックス推進員としてポートアイランド仮設住宅の支援を長く続けて来られた方です。その中でできた「マドンナ劇団」（素人演奏グループ）を使った災害公営住宅支援やきものリサイクルを通じた高齢者の仕事づくりをやりたいとおっしゃってます。これから仲間を増やして「まち研」のアドバイスを受けながら具体的な活動を目指したいそうです。

この方々以外に外国人のための翻訳ボランティアをやろうとするグループや知的障害者支援や留学生受け入れ支援を考えているグループが入居を検討中です。スペースとしては、全部で１０グループ位入れる予定ですので、ご希望の方は事務局までお問い合わせ下さい。

野崎隆一 VZD07604@nifty.ne.jp

まち研コラム　「路地裏の眼」

神戸復興塾は、非常時に立ち上がった「任侠心に燃えた知的集団」だった。いま、震災復興が非常時から平常時の対応に移ろうとする時期に船出する「神戸まちづくり研究所」は、新しい市民社会を担う住民主体のまちづくりをサポートする「市民の手によるまちづくりシンクタンク」といえる。

メンバーが重なる二つの集団は、コインの裏表のように変幻自在に市民のニーズに呼応して、時にはニーズに先走って、知的センスと知的行動力を発揮することが期待されている。金や組織で人を動かすことはできないが、市民の琴線にふれる知恵やアイデアの提案と、時には率先垂範した行動力で、市民と行政、企業の三つのセクター間に大きな橋をかけ、時代を切り開いていくことだろう。

発足して十一年になる明石まちづくり研究所（まち研明石）は、「市民の、市民による、市民のためのまちづくりシンクタンク」をめざし『市民の海』の中に人と暮らしのまちづくりネットワークを形成してきた。

人材豊富な「神戸まち研」は震災復興過程五年余の実績のうえに、新しいコミュニティー・シンクタンクの実績を築いていくことだろう。

（海千山千）